見上げる先には

ひな乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見上げる先には

【Ｎコード】
Ｎ８２５５Ｑ

【作者名】
ひな乃

【あらすじ】
恋人から手ひどく裏切られて、もうしばらく恋愛なんてしたくないと思っている咲。そんなとき、ある男が目の前にあらわれて。

不機嫌な朝

まぶしい。

明るい朝日が差し込んでいる。

ああ、カーテンを閉め忘れちゃったみたいだ。ゆるゆると覚醒してきたが、もう少し眠っていたい。今日は会社も休みだし、特に予定もない。ゆっくり寝ていても大丈夫だ。温かい布団の中へ頭までもぐり込んで、邪魔な光を遮った。

何のにおいだろう。

ほんのりと煙草が混じったようなにおいが鼻孔をかすめる。違和感で布団から顔を出すと、見慣れない光景が目に入ってきた。全体的に白っぽい部屋。小さな机の上には、ノートパソコンだけが置かれていて、こちらを向いていた。画面は真っ黒で銀色の文字がくるくる回っている。スクリーンセーバーになっていた。ベッドの横に視線をよこすと、小さなこげ茶色のラックが目に入る。その上には小さなコンポがあり、その隣には無造作にＣＤが積み上げられていた。

自分の部屋じゃない。

慌てて布団から飛び起きたら、頭が揺れた。脳が揺れている感覚に気持ち悪くなり、もう一度布団に沈み込んだ。

ここはどこなんだろう。

全体的にきれいに片づけられている。というか、あまり物がない部屋。隅には黒のモッズコートが無造作に置かれている。あきらかに男性もの。その隣によく見慣れた白いトレンチコートもあった。

「あ、起きたんだ」

扉が開く音と同時に、男のひくい声がした。

見たことのない男がカップを片手に持って扉から入ってくるところだった。上下スウェットに頭はぼさぼさ。明らかに寝起きだ。

嫌な想像が頭をかすめて、さっと手探りで自分の体を確認した。

大丈夫。ちゃんと服は着ている。
「昨夜、ってゆうかもう今日だな。あれだけ飲んでたから、ちょっと心配してたんだけど」
そう言って、男が近づいてくる。ベッドに寝たままの自分に気づいて、すばやく、だけど今度は頭が揺れない様にそっとベッドから起き上った。
「大丈夫そうだな」
それだけ言って、パソコンの横にカップを置いた。ぷんとコーヒーのにおいがこちらまで香ってくる。
こちらを向いたままの男には正直見覚えがなかった。思い切って口を開くが、出た声はかすれていた。
「あの、ここはどこですか？」
そして、あなたは誰ですか。さすがにそうは聞けない。
「俺の家」
それはそうでしょう。だが、それだけ言って男はのんびりコーヒーをすすっている。カップからは温かそうな湯気が浮かんでいた。
「あ、コーヒー飲む？」
まともに目が合う。ぼさぼさな頭に隠れていたのは、切れ長のくっきりとした二重。自分よりも若そうだった。二十一、二歳。いや、もしかしたら二十歳ぐらいかも知れない。ひげがうっすらと生えているのも見えた。
首を横に振る。それよりも早くはっきりしたい。
「どうしてここに私はいるんでしょうか？」
言葉にすると馬鹿な質問だ。恥ずかしい。
「あれ？覚えてないの？」
男は目を見開いた。
そっか、だいぶ酔ってたもんなぁ。とひとり納得をするように言った。
「あの店出た後ね、帰りどうしようかって話になって、終電出た後だったし。話してる最中にあなた寝そうになるし。で、俺の家が近

いから来る？って聞いたら、うんって。そんで、連れてきたわけ」
　カップを近付けひと口含んだ。
「コンビニ寄ったのも覚えてない？まだ飲むって言ってビールたらふく買ってたけど。で、それを俺に持たせてここに到着。着いたら勝手にベッドにもぐり込んで、いまってかんじだけど」
　とんだ醜態だ。頭を抱えてうずくまりたくなる。二十五歳にもなってこんなことをするとは。しかし、きれいに覚えていなかった。
「あの店って、このは？」
　たしか、このはという居酒屋に入ってひとりで飲んでいたはずだ。カウンターで何度もにがいビールをおかわりした。ビールのにおいを思い出すと込み上げるものがある。揺れる頭を総動員して記憶をたどると、確かに途中からスーツ姿の男が隣にいたような気がする。でも、それが目の前の男かどうかは覚えていない。
　目の前の男がぽかんとしている。頭がぼさぼさでその顔は、なんだかまぬけだ。
「え、本当に覚えてないの？もしかして俺のことも覚えてないとか？」
　そのまさかで、こわごわ頷いた。
「まじかよー」
　そう言って男はがしがしと頭をかいた。さらに髪がぐちゃぐちゃになる。
「あの、ごめんなさい。迷惑かけたみたいで」
「あのさぁ」
　男の顔があきらかにむっとしていた。不機嫌な顔。
「俺がこういうこと言うのもどうかと思うけど、やめたほうがいいよ。こういうの。今回はまあ、良かったけどさ。やばいでしょ。覚えてないのは」
　かっと顔に血が昇るのが分かった。まるで、尻がる女みたい。いつもこんなことをしているわけじゃない、と反論が口に出かかったが、この人に言ってもしょうがない。

「帰ります」
立ち上がり、隅にあるコートをつかんだ。鞄もその隣に置いてもらってある。それを、さっさと拾い玄関に向かう。小さな正方形の靴脱ぎ場には大きな靴が乱雑にあり、その中にある自分のブーツが異物のようだ。
背中から声が掛かった。
「道分かる？」
「大丈夫です」
正直、分からない。でも、早くここから出たかった。分からなければタクシーでもひろえばいい。
ブーツを履き、くるりと振り返った。男は、カップを持って壁にもたれかかったままだ。ありがとうございました。とおざなりに頭を下げる。
「いーえ」
不機嫌な声が帰ってくる。踵を返し、外に出てぱたんとドアを閉めた。
ため息が出た。
比較的きれいな茶色いドアには、表札は掛かっていなかった。新しいマンションなのだろう。ずっと同じようなドアが続いている。左右を見て階段を探した。結局誰なのか分からないままだ。

――やめたほうがいいよ。こういうの。
男の言葉が胸をひっかく。
そんなこと言われなくても分かっている。こんなこと始めてだ。お酒をひとりで飲むのだってそうだった。
目がじんわりと痛んでくる。
何であんなことを見ず知らずの人に言われなくてはならないのか。
何も知らないくせに。そう思うと、だんだん腹が立ってきた。
それもこれも全部圭吾のせいだ。圭吾があんなところに現われなければ。

すんなりとした圭吾の背中。寄り添う長い髪の彼女の後姿。
すごく、みじめな気分だった。

おさそいメール

机の上の携帯が震えた。

メールの着信を知らせるランプが光っている。

パソコンを打つのを中断して、こっそりと机の下で携帯を開いた。社内で携帯の持ち込みを禁止されているわけではないが、さすがに就業時間中に堂々と携帯を開くのは躊躇する。

典子からだった。絵文字がいっぱい使われた彼女らしい文面に自然に頬がゆるむ。食事のおさそいだった。しかも、びっくりすることがあるよとのこと。絵文字のくまがびっくりした表情をして動いている。

何かあったのだろうか。最近典子とは会ったばかりだが、自分の愚痴ばかり話してしまって、彼女の話を聞いていなかったように思う。

川瀬典子は、一番古い友達で、親友と言える人。中学校からの友だちでいまも連絡を取り合っているのは彼女ぐらいだった。

食事と言っても典子と一緒だと飲むことが中心になってしまう。自分はそんなに強くないが、典子はよく飲む。あの細い体のどこに入るのだろうといつも感心してしまう。しかも、浴びるほどアルコールを飲んでもケロリとしているのだ。肝臓にアルコール高速分解機能がくっついていると冗談で言ったことはあるが、半分は本気でそう思っている。

正直なところ、しばらくアルコールとは近づきたくない。でも、最近は典子に気を遣わせてばかりだから、たまには彼女の話を聞くべきだろう。

アルコールと言えば数日前の醜態を連鎖で思い出してしまう。あの朝のことは記憶から抹消してしまいたい。たまたま元彼の圭吾と彼女が一緒にいる所を見かけて、やけ酒をして知らない男の部屋で目が覚めたなんて、さすがに典子にも言えなかった。

「内田さん、ちょっと」
ひくい声に視線を上げると、課長がこちらを見ていた。はい、と返事をして携帯のフィリップを慌てて閉じる。
何か言われるのだろうか。課長の今日の機嫌は悪そうだ。ひょろりとして、頭の薄くなっている課長は体を張っているお笑い芸人と似ている。だから、真面目な顔をしていてもどこか面白い。影ではみんな江頭と呼んでいた。
課長の席まで行くと、無言で書類を渡された。
「どこが悪いかは自分で考えて」
課長の手は止まらず視線もパソコンに向かったまま。手渡されたのは、先日提出した書類だった。一見しただけでは、どこが間違っていたのか分からない。
また、レイアウトが気に入らないとかじゃないですよね。
機嫌がいい時なら冗談交じりにこのぐらいなら言える。でも、今日は口を開かない方がよさそうだ。課長は機嫌の落差が激しいから、そこは気を付けなければならない。以前、機嫌が悪い時に、新人の子が課長に軽く冗談でつっこみを入れたら怒鳴られて、オフィスの空気も一瞬で凍ったことがあった。
おとなしく書類を受け取り、自分の机に戻る。
「エガちゃん、機嫌悪ぅ〜い。咲、書類出すタイミング悪かったね」
隣の同僚がふざけてしかめつらをつくっている。エガちゃんとは課長のことだ。
「めずらしいよねぇ。エガちゃん、咲にあんな態度とるなんて。咲のことお気に入りなのに」
思わず苦笑いになってしまう。ただ、顔に出やすい人だから上手く立ち回れているだけだ。決してお気に入りなどではない。
「そんなんじゃないよ。いっつも顔に出てるじゃんあの人。今日は、機嫌イイ。今日は、悪いって。」
「確かに。でもさ、この前は凍ったよね。香山がなんか冗談言ってさエガちゃん怒鳴っちゃって。香山は泣きだすし、それ見てエガち

ゃんさらにヒートアップ！　エガちゃんも言いすぎだけど、あの子も相性悪いよね」
香山は後輩の女子社員だ。
イマドキの子という雰囲気で、手足もすらりと長い。分厚いアイラインにたっぷりとマスカラがぬられたバサバサの睫毛。
いまも、視界の端につやつやの長い髪がちらちらと入ってくる。
それが目障りでたまらない。

――頭を下げる圭吾の隣にその女はいた。
話がある。と呼ばれたカフェに行けば、香山が寄り添うように恋人である圭吾の隣にいた。その圭吾はと言えば、顔を見たとたんに頭を下げる。
「ごめん。咲」
そう言って、視線は下げたままだ。
「どういうこと？」
「ごめん。別れたいんだ」
は？
何を言ってるのだろうか。気付いたら声に出していた。
圭吾は沈痛な表情をして視線をまともに合わさない。完全に頭が混乱していた。
「ちょっと待って。よく分かんない」
「内田さん。ごめんなさい」
甘えたような声。香山を見ればいまにも泣きだしそうな顔をしている。なぜ、彼女がここにいるのだろうか。
そんなことよりも別れたいなんて、言いだす圭吾が理解できなかった。いままでそれなりに仲良くやってきたはずなのに。先週も一緒に遊びに行って、彼の家に泊まっていた。もちろんそんなそぶりもなかった。
いらいらして圭吾に視線を合わせる。

「ねぇ、圭吾。二人っきりで話したいんだけど」
視線を合わせた圭吾は、いつもの自信がある堂々したものではなかった。
「内田さん。ごめんなさい。あたしたち付き合ってるんです」
そう言って香山は泣き出してしまった。それを気遣わしげに見つめる圭吾。
ようやく納得ができた。
ようするに、香山と二股をかけられていたのだ。そして、圭吾は自分ではなくて、彼女を選ぶという。
泣きたいのはこちらの方だ。
「どうして私じゃなくて、香山さんなの？」
言いたいことはいっぱいあった。
いまにも取り乱して怒鳴りつけてしまいそうだった。しかし、それに反して自分の声はよわよわしい。
圭吾はまた、視線をテーブルに落とす。
「本当に勝手でごめん。彼女、妊娠してるんだ」
思わずふたりを見比べてしまった。
次の言葉が出てこない。驚いた。よく知った圭吾が急に知らない人みたいな顔に見える。
妊娠……ずるいと思った。圭吾の隣にいる香山の泣き顔がとたんに嘘くさく見えてしまう。混乱しているが頭の中はどんどん冷えて行くようだ。ふたりに対して、何とも言えない気持ち悪さを感じた。
――内田さんの彼氏って、カッコいいですねぇ。なんかエリートってかんじ。
香山にそう言われたのはずいぶん前のことだった気がする。
圭吾と一緒に居るときに香山と偶然会ったのだ。そのとき、香山に圭吾を紹介した。その後、ふたりは連絡を取り合ったのだろうか。ふたりで自分のことを笑っていたのだろうか。
どうやって、彼らと別れたのかは覚えていないが、取り乱さずにいたのは香山が後輩だったからだ。後輩に男を取られて怒鳴り散ら

した、などというのはあまりにみじめだ。せめてものプライドだった。そうしないと、あまりにも自分が可哀そうではないか。
それは、ほんの一か月前のことだった。あれから、圭吾とは連絡を取っていない。ただ、毎日香山とは顔を合わせている。

典子へのメールの返事をしようと思ったが、課長の目が気になった。もうすぐ昼休みだから、そのときにでも返事をしようと思い、携帯のフィリップを閉じる。
つやつやの髪を視界に入れない様にして、パソコンに向かう。だが、声は自然と聞こえてきてしまう。甘えたような少し高い声。
本当はもう、まいってしまっていた。平然とした顔をして会社に来ることも、香山と顔を会わせることにも。
毎日、つらかった。

おひさしぶりです

典子が指定したお店は、こじんまりとした鉄板焼き居酒屋だった。店内に入ったとたんにざわめきのような人の声に、鉄板のジュッと焼ける音、油のにおいと、一気に食欲がそそられる。金曜日のせいか狭い店内はいっぱいだった。奥の仕切られたテーブル席にショートボブの後姿が見える。典子は先に来ていた。

カウンターで鉄板を前にヘラを巧みにさばいている店員を見て、どうせなら、鉄板を前にして食べたかったな、なんて思ってしまう。調理されるところを見るのはあざやかで面白い。

「ごめん。待った？」

典子は、全然、と言いながらいじっていた携帯をテーブルに置き、血色のいいまるい頬をほころばせた。その安心させるような笑顔にはいつもほっとさせられる。しかし、本人は学生時代から丸顔を気にしているらしく美顔器、エステと散財していた。

「典子、今日仕事は？」

典子の休みは不定休だ。自分のように土日が休みという訳ではなかった。

「休み。だから朝から大掃除しちゃった。ついでに部屋の模様替えもして。でも、明日は早いんだよねぇ。今日はほどほどにしとかなきゃ」

そう言ってぱらぱらとメニューをめくる。典子は看護師だ。彼女を見ていると仕事はハードなくせして年々遊びもパワフルになっているように見える。自分のように休日にゆっくり昼まで寝ているなんてことはない。最近では、新しくできた彼氏の影響でゴルフを始めたばかりだ。その前はサーフィンで前の彼氏の趣味だった。熱しやすく冷めやすい。一言でいえば典子はそんなタイプだ。一度はまると周りも見えないくらいにのめり込むが、冷めてしまえば見向きもしない。いつもそんな典子に呆れていたが、いまはうらやましい

と思っている自分がいた。

「先に飲み物たのもうか？」

典子は料理のページを開けていた。

「あ、待って。実はさあ……もう一人来るんだよね」

「誰？」

聞いていない。

「うーん。来てからのお楽しみ」

へへっと典子が笑みを浮かべた。

ケイくんかな。

ケイくんとは典子の彼氏だ。「ケイくんの友だちにすっごいイイ子がいるんだよ。咲に紹介したい」とこの前から言われていたのを思い出した。

「言っとくけど、ケイくんじゃないからね」

自分の考えを読んだように典子は言いい、「さて、誰でしょう？」というようににやにやと笑っている。

「ヒントはね、びっくりする人。咲も会ったら驚くよ」

「えー、ぜんぜんヒントになってないじゃん」

いろいろと頭を巡らせてみるがこれという人が思い浮かばない。

元々、自分と典子には共通の友人と言うのはあまりいない。中学卒業後の進路が別々だったからだ。学生時代は友だちを紹介して遊んだこともあったが、長続きはしなかった。最初はお互いに気を使っているが、盛り上がる内輪の話になると（何組の誰は誰と付き合っているとか）典子がついて来れなかったり、また逆に自分が分からなかったり、ということがあった。特に女の子は仲間意識に敏感なので、お互いに空気感の違いが出てくると場は自然としらけてしまい、いつしかそういうことはやめていた。

「ああ、お腹すいた―」

典子がメニューを置き、携帯のディスプレイを開く。何も連絡がなかったらしく、すぐにぱたんと閉じた。『びっくりする人』から

の着信はないらしい。

からからという店の引き戸が開く音がして、そちらに視線をやると黒のモッズコートを着た男が入ってきた。

どこかで見たことがあるような顔に目を凝らす。

ああ！　思い当たった人物に息を飲んだ。一瞬声が出そうになったが、慌てて呑み込む。下を向いて顔を隠しメニューを立てて選んでいる振りをする。

――最悪。何もこんなせまい店で一緒にならなくても。でも、薄暗いし大丈夫かな。

ぐるりと見渡せる店内。男も待ち合わせ顔だ。仕事帰り風のスーツ姿で、今日はぼさぼさの頭ではなく整髪料できっちりと整えられていた。

「あ、来た来た。遅っそいよぉ」

大丈夫。多少苦しいけど、このまま顔を隠せないことはない。

「ごめんごめん。でも、ここ分かりずらかった」

「連絡くれればよかったのにぃ」

でも、いまから典子に言って店代えてもらおうかな。

「えへへ。咲、びっくりした？」

自分の考えに入りこんでいたらしく『びっくりする人』が来たことにも気付かなかった。冷静になりつつ顔を上げてその人を見て固まった。

「びっくりした」

思わず口を吐いてでていた。

にやにやと笑みを浮かべる典子のとなりには、黒のモッズコートを着た男が立っている。

二度と思い出したくない、あの朝のことがよみがえる。

――やめたほうがいいよ。こういうの。

屈辱的な言葉を投げた男はあの日とは違い、八重歯を覗かせて人なつっこい笑みを自分に見せて言った。

「どーも。おひさしぶりです」

やられた

こちらの表情を見て典子は満足そうにしている。
「実はさあ、似てる人がいるなって思って声をかけたの。あ、うちの病院でなんだけどね」
「いやいや、川瀬。声をかけたんじゃなくて、むしろ叫んでたでしょ。かなりの声で俺の名前。病院で看護師に大声で名前叫ばれてさ、かなりみんなの注目集めたからね」
「いやー、こっちは、ああっ！　て思って無我夢中だったから」
あははと典子が甲高い笑い声を上げた。
すると男の方は呆れたような表情を浮かべる。
自分だけがよく分からないまま、流れのように飲み物を注文し、乾杯をして、ふたりの話を聞いていた。
最初は、典子がこの男の部屋に泊まったことを知っているのかと焦ったがそんなはずはない。もし、知っていたとしてこんなことをしたら、冗談にしてもたちが悪すぎる。そして、そんなことを考えていたら、ふたりには分かっているものだと思われて、名前を聞くタイミングを逃してしまった。いまさら聞くのも失礼になってしまう。
「でも、よく俺のことすぐ分かったよね。こっちは最初川瀬だって分かんなかったし」
「うーん。私、結構覚えてる方だと思うよ。人の顔とか名前覚えるの得意だし。で、相変わらず童顔だし」
「おい、童顔って！」
典子は男の言葉を流した。
「咲だってすぐに分かったよね？」
「え？」
ふたりがこちらを注目する。
なるべくふたりの話を聞いて記憶をたぐりよせていたが、あの朝

のことが衝撃的でこの男に関してそれ以外のことが出てこない。
「ええっ！」
もしかして、と典子がこちらを訝しげに眺める。
「咲ったら。まさか、分かってなかったのお？」
家ならよく知ってるけど。あの朝、最寄り駅が分からなくて結局駅までタクシーを使う羽目になっちゃって最悪だったのよ。なんて、言えるわけがない。
「信じらんない！　五十嵐だよ。ほら、中学で一緒だったでしょ」
典子が叫ぶと、となりの男は我慢ならないというように吹き出して、肩をふるわせている。
思わず、ああという言葉が漏れた。
五十嵐――中学の同級生。たしかに、記憶のひもを引っ張り出すと、そんな名前の子がいた。さらに引っ張ると、黒い学ランを着て、他の男の子に比べると小さくて子供っぽい、にぎやかな男の子がおぼろげに浮かんでくる。しかし、それが目の前の男と結びつかなかった。
目の前にいるのは、スーツを着なれているサラリーマンだ。太い首にしっかりとした肩。線の細い男の子の姿はないし、あの朝の学生のような雰囲気もなかった。
「あー、ショックだなー。こっちは一目見て内田だって分かったのにな」
声に顔を向けると、五十嵐がにやにやと笑っている。もちろんショックを受けた風でもなく、むしろ面白がっている表情だ。
「ごめんなさいねぇ。すっかり変わってて分かんなかった」
こちらも冗談のようにおどけた風を装うが、内心焦っていた。自分は中学の同級生に醜態をさらしてしまったのか。
「じゃあ、何であんなに驚いてたのかなぁ」
「そうだった？」
ちょっと！　性格悪いんじゃない。そう言ってやりたいのをなんとか飲みこんだ。五十嵐を見れば、素知らぬ顔をしている。

「たしかに十年ぶりぐらい？　だよね。同窓会も一回もなかったし。誰か知ってる人とかっている？」
先ほどの会話は典子には気にならなかったようだ。
「けっこう県外に出てるやつとか多いよ。あと結婚したやつとか」
ふたり口から懐かしい名前が出てくる。誰が結婚して子供が二人いるとか、誰は結構いい所に就職しているとか。思い出す顔は学ラン、セーラー服姿だが、本当の彼らは目の前の五十嵐のようにスーツを着ていたり、子供を抱いたりしているのだろう。
そんな彼らを想像すると、自分が置いてきぼりにされたような気分になった。もし、圭吾と結婚をしていたら自分もこんな風に誰かの噂に上がっていたのだろうか。そんな思いが頭をかすめた。
「ちょっとトイレ」
そう言って五十嵐が席を立つ。彼がひとりになるのを待っていたので、典子に怪しまれない様に時間をおいてトイレに向かった。
せまい店内だが、トイレは座っていた席からは見えない場所にあることは、チェック済みだった。トイレは男女兼用で一つだけだったが、前で待つというのは気が引ける。困っていたら、そう時間も置かずドアが開く音がして五十嵐が出てきた。
「びっくりした。何もそんな真ん前で待ち構えてなくても。あ、何か拭くもの持ってない？」
「持ってない」
「あ、そう」
手をぷるぷると振っている五十嵐の飄々とした態度を見ていたらむしょうに腹が立ってきた。
「そんな怖い顔しなくても、川瀬には言ってねーよ」
そんなことは典子の顔を見て分かっていた。追ってきたのは、あの日のことを弁解したかったからなのに、いざとなると何も出てこない。
五十嵐はトイレの前のドアに寄り掛かった。
「ま、俺も悪かったんだけどね。最初、内田がひとりで飲んでると

こ見かけて、面白半分で声かけたら全然気づかないでしょ。そんで、あなたの止まらない愚痴を聞いてたら、潰れてしまって――」
「ちょっと待って。私、愚痴ってたの？」
「うん。ケイゴとカヤマの話をえんえんと」
思わずへたり込みそうになる。最悪だ、かっこ悪い。五十嵐は圭吾たちの名前まで覚えてしまっている。
こちらを見てまずいことを言ったと思ったのか、あーと言いながら頭をがしがしとかいた。
「まあ、あれですよ。きついときは誰でもああなるって。そんなときは飲んで愚痴ってさ、ため込まないで発散した方が体にいいし」
ああなるってどうなったのか聞きたくもない。
とりあえず、五十嵐にはあやまって置くべきだろう。後悔はひとまずとっておくことにする。
「ねぇ、それってくせ？」
その声に視線を上げると、五十嵐の顔が思ったより近くにあり一歩後ずさった。なぜか背中を折って覗きこまれている。
「何？　もう、びっくりするじゃない」
「だってさ、小さすぎて顔見えないんだよ。どんな顔して話聞いてんのかなって思って。俺、ひとり事言ってるみたいじゃねぇ？」
「悪かったわね」
失礼だ。たしかに背は低いが、笑っている五十嵐だってそうではないか。圭吾は背が高かったが、そんなこと言われたこともなかった。ほぼ初対面の人を覗きこむなんて暴挙に近いが、五十嵐はちっとも気にしていない。マイペースだ。それは、あの朝に会った人とは印象が違う。もっと突き放したような冷たい感じを受けたのに。
「あの日はごめんね。迷惑かけて」
「いや、こっちも不親切だったかもって思ってたから。たださ、酔っぱらいを大変な思いして抱えて家まで帰ったのに、朝起きたら誰ですかじゃこっちもさすがにムッとして……でも、やっぱ態度悪かったかな―って」

なんだ。そう思って肩の力が抜けた。文句を並べられるのかと思っていたが、そうではなかった。
いや、本当にすごかったよ。そう言って五十嵐は自分が忘れていることを喋り出しそうになっている。
「ちょっと待って！　もう、あの日のことは忘れて。本当に迷惑かけてごめん」
一気にまくしたてるように言って五十嵐を見ると、八重歯を見せて苦笑いを浮かべている。
「別に気にしてねーよ。だから、内田も気にすんなよ」
じゃ、戻るわ。と背中を見せる。ポケットに手を入れて、ゆったりと足を動かした。
「ねぇ、私、学生かと思ってた」
「はぁ？」
こちらを振り返った顔がいかにも不服そうで笑いが込み上げる。背が低いと言われたことのちょっとした仕返しだ。さっき典子に童顔と言われてつっこみを入れていたのを思い出したのだ。
でも、嘘ではない。あの朝、二十歳ぐらいと見積もっていたのだ。
五十嵐は不敵に笑みを浮かべる。
「へー、内田はそんな若い男に声かけられると思ってたとはなー。いやいや、こりゃびっくりだわ」
すごいすごい、と言いながら席に戻る背中を見て、やられたと思った。

着信あり

「先にお風呂入ったわよー」
階下から聞こえる母の声に、話していた携帯電話の通話口を押さえて、はーいと返事をする。
「大丈夫？」
携帯電話から、母の声が聞こえたらしい典子に大丈夫だと答える。
「でもさぁ、五十嵐面白いよねー。相変わらずって感じ」
相槌を打ちつつも、相変わらずというほど学生時代の彼を知らなかった。自分にはそんなに印象が残らない人だったが、逆に再開してからの彼はインパクトは強い。
しゃがみこんで、さっき押入れから引っ張り出してきた本――希望と、でかでかと書かれた白い表紙の卒業写真を開いた。たしか、三年F組だったはずだ。みんなの顔写真があいうえお順に並んでいる中で、五十嵐はすぐに見つかった。真面目な顔をしているつもりなのか仏頂面だ。五十嵐友介と書かれた写真からひとりはさんで内田咲と自分の名前があり、思わず苦笑する。誰かさんのことを言えないような固い表情をしているではないか。
「五十嵐も嬉しかったんじゃない？　咲と会えてさ。何か言ってた？」
「何を？」
「ふふ。なんかね、中学のとき、咲のこと好きだったらしいよ」
「えーっ」
びっくりだ。
「だって、病院で会って飲みに行こうって話したときにね、咲も一緒にって言ったら、まじで、会いたいって。実はあのとき好きだったんだって」
くふふ、と笑う声ににやにやとしているであろう典子の顔がすぐに思い浮かぶ。

「何か言われた？」
「別に何も」
自然にがっくりと肩を落としてしまう。
それはそれは……何とも悪いことをしてしまった。美しかった？
であろう中学生の彼の恋心を踏みにじってしまったのが容易に想像できる。
「そっかー。なーんだつまんないのっ」
「逆に何かあったら、それの方が怖いって。一体卒業して何年経ってると思ってんのよ」
「たしかにねー」
けらけらと典子が笑う。
また、飲みに行こうねーと言って、通話が切れた。
もう一度、仏頂面の五十嵐に視線を向けると、不思議な気分になった。この男の子に自分の知らないところでそんな風に思われていたとは、嬉しくもあるが面映ゆい。個人の顔写真の下にある集合写真は、教室の後ろで撮られたものだろうか。黒板にはありがとうという大きな文字がいろんな色のチョークで飾られていて、その周りには何が書かれているか写真ではよく分からないが、いろんな落書きが黒板一杯に書かれているようだ。それをバックにして、それぞれ思い思いのポーズをとっている。自分も笑顔でピースをしており、典子もその中にいる。五十嵐はと言えば、後ろの方でふざけているような顔をして映っていた。三人とも幼い顔をして、楽しそうな顔で笑っている。たしかにこの頃は楽しいことや目新しいことばかりが自分を待っていた。退屈なんて知らない表情。この頃の自分がいまの状態を見たら何て言うだろうか。
再度、階下から母の声が聞こえた。いつまでたってもお風呂に入らないから、声が聞こえてないと思われて呼びかけられているのだろう。自分の返事は母に聞こえなかったようだった。
さっきより大きな声で返事をし、お風呂に入ろうと卒業写真を片づけていたら、携帯の着信音が鳴り響いた。

誰だろう。
開いて名前を見ると一瞬間違いかと思った。
携帯を置くこともできず固まっていると、それはなかなか鳴りやまない。
着信音は、いま人気の男性アイドルグループのもので、耳慣れた曲が三回繰り返された。

続・着信あり

静かになった携帯電話をもう一度開き、着信を確認する。
なんで、いまさら。そう思うが、しばらくその名前から目が離せなかった。
佐野圭吾。
最後に香山と三人で会った日以来連絡が来たことはない。三年付き合って、別れるときには女を連れて来て、こちらをまともに見ることさえできない男。
携帯電話を乱暴に閉じて、勢いよくベッドに倒れ込んだ。
さっきまで膨らんで上がっていた気持ちが、急にしぼんでいってしまった。瞳を閉じると真っ暗なのに、自然と圭吾の姿が浮かんでくる。我儘なところもあったけど、かっこよくていい会社に勤めている、ちょっと自慢の彼氏だった。
きっかけは友人がセッティングしたコンパで、今日は咲好みの人がいるらしいから絶対来ること！　と言われて、そんなに期待せずに行ったら、圭吾を見た瞬間に気に入ってしまった。面食いと周りには言われているが、確かに男前に弱くて、それは自分でも自覚している。多くはない元彼も顔だけは良かった。その中でも圭吾のすっきりとした顔立ちは本当に好みで、おまけに物腰も穏やかで喋りやすいのもポイントが高かった。自然とこちらのテンションは上がり、その日に携帯番号を交換して、メールのやり取りを始めて、付き合いだすのにそれほど時間はかからなかった。
――咲ってば、イチバンおいしいところ持ってたよね。
一緒にコンパに行った友人からは口々に言われた。あの時の頑張りは、いま思い出すと自分でも感心する。圭吾は話をすると合わせるけど、彼からは何のアプローチもなかったから、すべてこちらから発信しなくてはならなかったのだ。付き合ったのは、努力の結果だったのかも知れない。

いまはあんなパワーでないなぁ。というか、もうしばらく恋愛なんて考えられないや。
付き合いだしてからの圭吾は優柔不断なところがあったけど、基本的に優しいしマメだった。大きな喧嘩もなく、ちらほらと結婚をほのめかすような話も出ていて、自分も漠然と圭吾と結婚するんだろうなと思っていた。指輪はティファニーがいいなんて冗談で言ってみたりもしたっけ。
私ってば、結構夢見ていたんだなぁ。
自嘲的に笑い、ごろりと寝がえりを打つと、机の上に置かれた何も貼られていないコルクボードが目に入る。以前は圭吾との写真でいっぱいだったが、いまははがした後のピンの穴が残っているだけだ。
何で、圭吾は今頃電話をしてきたんだろう。
手の中にある携帯電話はひんやりとしていて静かだ。いまボタンを押せばすぐに圭吾につながるだろう。こちらからは、何？　と言えばいい。でも、いまさら圭吾と話すことなんて何もなかった。

次の日。会社では香山の寿退社が朝礼で発表された。
挨拶をする課長も今日は機嫌がよさそうだ。香山もみんなの前で額面通りの挨拶をして、それに対してみんなと同じようにこちらも拍手を送った。妊娠の発表はもちろんない。
しかし、女性と言うのはするどかった。
「絶対おめでただよね」
昼休みトイレで化粧を直しながら同僚が言ったことに驚く。おめでた、イコール妊娠。朝聞いてから、昼休みまで、言いたくてしょうがなかったらしい。
「しかも事情があると見た」
「なんで？」
あんたはエスパーか、と思いつつも平然を装う。何気なく髪を触

りながら、しかし実際は同僚の顔を隣り合った鏡越しに凝視していた。
「だってさぁ、この時期に急に退職するなんてへんじゃない？　しかも、寿退社なんて。あの子から男の話聞いたことある？　ないでしょ。前の彼氏のことはべらべら喋ってたのに。それもへんじゃない？」
そう言うとコンパクトをぱちんと閉めて、こちらを見てにやりと笑った。正直その笑みと読みの正確さが怖くて、なるほどと相槌を打つだけにした。
「もしかして、香山と何かあった？」
「何で？」
恐々とした気持になる。見透かされているのか。
「だって、咲もへんだよ。香山と全然喋らなくなったでしょ。いままでは香山のこと庇ったりフォローしてあげたりしてたのに」
「……そうかな」
疑うようにちらりとこちらを見たが、どう言ったらいいものかと反応出来ずにいると、視線をすぐに戻してポーチを掴むとドアのノブを握った。しかし、一息吐いてこちらを振り返る。
「いいけどさ。ただ、周りも気にしてるよ。この前なんかエガちゃんにも言われたもん」
エガちゃん――課長に？
「内田は最近調子どうなんだって心配してたよ。香山のことも気にしてたけど……まあ、部下のプライベートにまで気を揉んでるから、禿げるんだろうけどね」
また、薄くなったよね。いひひ、とこちらを見て笑った。
だから、機嫌に落差あっても少々のことでは憎めない人なんだよねぇ。という呟きには、うんと正直に答えることができた。課長には後でコーヒーでも淹れてあげよう。
同僚がドアを開くと、その前に香山が立っていた。
顔を見なくてもつやつやの長い髪ですぐに彼女だと分かる。

現れるタイミングが良くて、話を聞かれたのだろうかと思ったが、別に聞かれていたってかまわない。同僚も同じだったらしく、お疲れさまとにこやかに挨拶をして出ていく。彼女の強さに感心しつつ香山の横を通ったら不意に腕に手を置かれた。肌荒れなど無い白い小さな手。驚いて手の主を見たら、久々に視線を合わせる顔だった。相変わらずしっかりと化粧されていたが、顔色が悪いのが見て取れた。

少し痩せた感じがする。視線を上げると、向こうはまっすぐにこちらを見ていた。

「何？」

出た声は、撥ねつけるような冷たさを含んでいて、自分が出したとは信じられなかった。だが、目の前の青白い顔に変化はなく、無表情だ。

「見ましたよぉ。この前、男の人と一緒にいるところ」

いたい。

見れば、腕が食い込むように香山の手にしっかりと掴まれている。腕を引けばいいのに、体が固まって動かなかった。

香山は笑っていた。

「やりますよね。彼に言ったら、びっくりしてました」

五十嵐と一緒のところを見られたのだろうか。と頭を翳めた。別にどう思われようがかまわない。

この子は一体何が言いたいのだろうか。

香山はじっとこちらを凝視している。表情は笑みを作っているが、目は真剣だ。

気味が悪い。

「それが、何？」

「別に。ただ、彼も私も内田さんを傷つけたって心配してたので、安心しました」

二の句が継げなかった。ばかばかしい。この子が何のつもりなのかさっぱり分からないが相手になんかしていられない。

勢いよく腕を振り掴まれている手を払って、香山をおきざりにする。
冷静を装っていたが、トイレから遠ざかり、初めて自分の息が切れていたことに気付いた。

つめたい風　1

結局あれから、業務に戻ったがちっとも頭は働かなかった。香山が気になって視界に入れないようにすればするほど、仕事が進まなくなってしまう。急ぎのものもなかったため、ほぼ定時で会社を出たが、そのまま帰る気にはなれない。

しかし、今日は平日だ。典子だって仕事だし。

思いとは裏腹に足はしっかりと動かしており、駅は見えて来ていた。おまけにこの夕方の時間帯に電車に乗ると学生がいっぱいできっと座れないだろう。

冷たい風が入ってこないように首元のマフラーをきゅっとしめた。

すると、ため息が自然にでてしまった。

「背中曲がってるぞ」

背後からのそれに最初、自分のことだとは気付かずにいると、頭を小突かれて驚いて振り返ったら五十嵐が笑っていた。

いつかの日と同じ黒のモッズコートを着て、両手をポケットに突っこんでいる。

「や、偶然」

そう言って黒い手袋がはめられた手を上げた。こちらもびっくりして立ち止り同じように手を上げてしまった。そんなふたりの周りを足早に家路を急ぐ人たちが通り抜けていく。

「びっくり。五十嵐って会社この辺なの？」

「いいや。今日は待ち合わせ。んで、ちょっと時間早いし、どっか入ろうかと思ってたら、下向いて背中丸めた人が歩いてきたわけ」

そこで、言葉を切りにやりと笑う。

「あなた、ただでさえ小さいんだからそんなことして歩いてたら周りの視界に入らなくて踏まれちゃうわよ」

失礼な。

「……私は虫ですか？」

それには答えず、何が面白いのかけたけたと笑っている。
その顔を見たら呆れてしまった。もう、虫でもいいかも。踏みたかったら踏んでもらって結構だ。でも、やっぱりぺっちゃんこは嫌だな。いやいや、思考がおかしくなってるから。しっかりしなきゃ、と首を横に振った。
「おい内田。虫なんて言ってねーから」
心配したような声音で五十嵐がこちらを覗きこんでいた。この人の癖なのか、やっぱり急に顔が間近にあると驚く。
「なんか小動物ぐらいだって。ほら、うさぎとかねずみとか」
五十嵐はこれぐらいと言うように手で水をすくうような形をして見せた。
「……何それ」
もう。
ちっともフォローになってない。
にたにた笑っている五十嵐に何か言ってやらねば、と考えていると、
「友介？」
という女の人の声が背後から聞こえた。
振り返れば、背の高い女の人が驚いたようにこちらを見ている。目の前の五十嵐は、おー、と見知った風で微笑んだ。
誰？　と思ったが、そう言えばここには待ち合わせでいるって言ってたっけ。
女性の方はこちらを見て頭を傾げ、五十嵐に視線を向けた。同じく誰？　とでも言うように。いちおうこちらも倣って軽く頭を下げる。
「あー、早かったじゃん。仕事もう終わったの？」
頭をがしがしとかきながら五十嵐が言った。女性が頷くと、肩で切りそろえられた髪がぱらりと顔に掛かった。
五十嵐と並んでもあまり変わらないくらいの身長を持つこの女性を一言でいえば、洗練された、という言葉がぴったりな気がした。

全身黒でまとめられていて、隙がないという雰囲気を醸し出している。
「こちら内田さん」
「で、こっちは藤森さん」
五十嵐がやる気なく紹介をした。どーも、とお互いになんとなくという風なぎこちない挨拶を交わす。すると、藤森さんの瞳は上から下に動いてこちらの顔に戻り目が合った。吸い込まれそうな大きな瞳は検分しているという感じでどうも落ち着かない。
「じゃあ、私は行くね」
そう言ってその場を立ち去ろうとすると、おぅまた、とあっさりと手を上げた。藤森さんの方へも軽く会釈をして、駅へ向かう。
急に風が強くなった気がした。
頬を切るような冷たさに身を縮めた。全身が一瞬で冷えていってしまう。
「ねぇ、待って」
足を止めて振り返ると、間近に藤森さんがいた。彼女の後ろ、少し離れた位置に歩く人並みにまぎれて五十嵐が立っていているのが見えた。
「私たちこれから食事に行くの。よかったら一緒にどう？」
そう言って口角の上がった唇はきれいに彩られていた。

つめたい風　2

「いや、悪いんで」
やめておきます。と続けたかったが、藤森さんはそれを遮って、
「全然そんなことないよ！　行こうよ」
にっこりと笑う、すると口角が均等に上がり、その美しさに思わず見とれてしまった。
ほら寒いしと言って、五十嵐のほうへ歩いていこうとする。
強引だ。
正直なところご遠慮したかった。たしかに家へ帰りたくなかったが、知らない人と食事をする気分ではない。
今日はやっぱり大人しく帰ろう。そう口を開こうとしたら、あ、と思い出したように言って藤森さんがこちらを振り返った。
「何か食べたい物とかある？」
「あー、特には……」
ばか。何で断らないのよ。
藤森さんの元気さというかパワーに押されてしまっていた。やっぱり美人だからだろうか。
「友介―。内田さんも行くって！」
呼びかけられた五十嵐はポケットに手を入れたまま、ゆったりとこちらに歩いてきた。
「どうせまたお前、強引に言ったんじゃないの？大丈夫なの？」
前半は藤森さんに、後半は自分に向けてだった。
「強引って失礼な」
藤森さんは唇を突き出して頬を膨らませた。
「理華、お前は黙ってろって。もういいじゃん内田も困ってるし」
藤森さんを理華と呼んだ五十嵐に驚いた。
中学の時は、女の子を名前で呼ぶような子は一部の子たちだけだった。五十嵐はそういうタイプではなかったと思う。ただ、あれか

ら十年も経っているのに五十嵐が中学生のままいる訳がない。
それが、寂しく感じるのはなぜだろうか。
彼女の方も友介と呼び、お互いに名前で呼び合って仲がいいんだなんて思った。そんなことを気にしている自分に苦笑をしてしまう。
五十嵐はと言えば眉を寄せて渋面を作っていた。それは寒さのせいかもしれないが、不機嫌に見える。あの朝のような顔だ。
「そんなことないよねぇ？」
心外だとでも言うように藤森さんがこちらを見る。返事に困って五十嵐を見れば、鼻にしわを寄せていた。
結局、断りづらくなってしまい曖昧な笑みを作って頷いた。

「中学の同級生だったんだぁ」
三人で入ったのはパスタ屋だった。
出来たばかりのお店らしくて、平日なのに混んでいたが、予約をしていたらしくすんなりと個室に座ることができた。木目調で統一された店内は落ち着いた雰囲気で、真新しい。
藤森さんは、こちらのことが気になっていたらしく、座ったらすぐに質問攻めにされた。五十嵐は珍しく無言だ。
やっぱり来ない方が良かったのかもしれない。
目の前に置かれたカルボナーラは湯気が立っており、クリームチーズのにおいが食欲をそそられる。フォークに巻きつけて口に運べば、想像通りのねっとりとした濃い味が口の中に広がった。
「なーんだ。すっごい楽しそうにしてたから、もしかしてって思ったのに」
そう言って、意味深に五十嵐に笑いかけ、グラスを持ち上げた。中身のウーロン茶がゆらゆらと揺れる。
「はいはい。何？　お茶で酔ったの？」
「酔う訳ないじゃん。あー、やっぱりアルコール飲みたい！　内田さんも良かったの？」

それ、とこちらのグラスを指差した。同じく茶色の液体が入っている。
「いや、アルコールはちょっと……」
「これこれ、内田に飲ませると凄いからやめておきなさい」
「え？　そうなの？凄いって、どんなの？」
藤森さんが身を乗り出してくる。
「そりゃ、脱ぐし暴れるし、説教するし――」
「ちょっと五十嵐！　そんなことしてないでしょ。」
五十嵐の言葉を遮ったが、隣の藤森さんは面白がって笑っている。
「友介、説教されたの？」
「そうそう、この不景気に対してね、そりゃもう延々と」
私は居酒屋で愚痴ってる親父かい。
五十嵐を睨んでやるが、ちっとも効かないどころか面白そうにしているだけだ。
「お互い今の政治に関して語り合ったよねぇ」
「なにそれ」
ひとりで言って笑っている。どうやら不機嫌は治ったらしい。
「面白そう！　飲もうよ。内田さんが飲んだところ見たい」
そう言って店員を呼ぼうとする藤森さんを五十嵐が止めた。
「とりあえず、今日はやめとけって」
命令するような声だった。
「はいはい。じゃあ、残念だけど」
藤森さんもすんなりとそれに従い、
「また、今度飲もうね」
と、こちらに向けてきれいに口角の上がった笑顔を見せた。

つめたい風　3

電車が通過するアナウンスがホームに流れた。
いつもその籠ったような声を上手く聞き取れないでいた。結局携帯を操作して発車時刻を確認してしまう。
食事を終えると、ふたりとは駅で別れた。
ホームの人はまばらで、みんな疲れた顔をしているが、自分もそのひとりだろう。吹きつける風に髪がぐしゃぐしゃになってしまっているが、もう気にならなかった。もうどうでもいい。
やっぱり行かなければよかった。
口の中は先ほど食べたカルボナーラのおかげでまったりしている。
始終藤森さんは元気で、よく喋っていた。彼女の話は面白くてつい引き込まれてしまう。営業をやっていると言っていたが、話し方が上手いのだろう。あの五十嵐が相槌を打ってばかりいたのが可笑しかった。

「今日の友介見てびっくりしちゃった」
帰り際、五十嵐が席を立って、藤森さんとふたりきりになったときにおもむろに彼女が口を開いた。
「え？」
「あんな風にからかってるの初めて見たから」
藤森さんが、ふふっと笑う。それを聞いて恥ずかしくなった。
「実はね、今日私の快気祝いだったの」
見る限り元気が有り余っているように感じていたから驚いた。
藤森さんは苦笑して、ぺろりと舌を出す。「実はね入院したの。二日ほどだけどね。過労だって」
過労。
とてもそんな風に見えない。藤森さんは、やつれた様子もなく、すれ違う人が振りかえるような美人だ。

「会社の帰り道に倒れて、そのまま病院へ運ばれたの。救急車って初めて乗ったんだけど、あんまり記憶ないんだよねぇ。あ、そんな顔しないで。もう、全然大丈夫なの。で、病院では検査してすぐに退院だったんだけど。だから、友介が心配して、ごめんね」

これ、とウーロン茶の入ったグラスを軽く持ち上げる。

だから、五十嵐がアルコールを止めたのか、と思った。藤森さんを見てゆるく首を横に振る。

思い当たることがあった。

なんだ。

そうだったのか。

「その入院していた病院ってもしかして――」

典子の勤務している病院の名前を言うと、藤森さんは驚いたように肯定した。

――いやいや、川瀬。声をかけたんじゃなくて、むしろ叫んでたでしょ。かなりの声で俺の名前。病院で看護師に大声で名前叫ばれてさ、かなりみんなの注目集めたからね

以前言っていた五十嵐の言葉が思い当たった。病院へ行ったのは、彼女のためだったのか。

五十嵐と藤森さんは似合わないと思う。彼女が大人っぽい美人で、五十嵐が童顔のせいだろう。並ぶとどうしても五十嵐が年下に見えるし。

そんなことを五十嵐に言ったら、また何かうるさく言ってきそうだ。

思わず笑いが込み上げてくる。

だが、なぜだか寂しい気持ちになる。ほんの少しちくりと胸が痛んだ。

なぜだろう。

五十嵐と会って少し浮かれていたみたいだ。

ばかみたい。

頬を切る風は冷たく容赦がなかった。
もう、感覚はなかった。

まもなく電車が到着するとアナウンスが流れた。人がまばらに集まってくる。
携帯が振るえていることに気付き、鞄の中をさぐると着信のランプが光っていた。
圭吾だった。
あれから、何度か着信はあったが、すべて無視をしてきた。
だが、気付いたら通話のボタンを押していた。
「咲？」
久しぶりに聞く声。
落ち着いたひくい声が耳に響く。
「よかった、繋がって。いま大丈夫？」
何か言わなくては、と思うがどうしたらいいのか分からず、うん、とだけ返事をする。すると、通話口からほっとしたような雰囲気が感じられた。
それが無性に嬉しかった。
「咲は今さらって思うだろうけど、ちゃんと話がしたいんだ」
圭吾の声は真摯に響く。その声を聞いていると、言いたいはずの文句は出てこなかった。
「会いたい」
気付いたら、私は、うんと返事を返していた。
電車はまだ来ない。

小雨

次の日は雨だった。

ぱらぱらと落ちる小雨が、普段より余計に肌寒さを感じさせ、ただでさえ会社での居心地が悪いというのに、出勤するのがさらに億劫になってしまっていた。しかし、出勤してしまえば、いくら気分が沈んでいても習慣化した朝の業務を機械のようにスムーズに進めている自分がいる。電気ポットのスイッチを入れ、観葉植物たちに水をやり、軽く掃除を始める。もちろん綺麗好きと豪語している課長の机は念入りにしておくことも忘れない。それが終わればパソコンの電源を入れてメールチェックをする。

行動が機械化しているせいか、頭の中は別のことをつい考えてしまう。思い出したくないのに気付けば五十嵐の童顔が浮かんで来ていた。八重歯がのぞく笑顔や憎たらしいことを言うときのしてやったりという表情、不機嫌な顔。昨日もそんな顔を見せていた。五十嵐は思ったことが結構顔に出るタイプのようだ。そして、それに連なるように藤森さんが現れる。自分に自信がある喋り方に、綺麗に上がる口元。なぜ、彼女は自分を誘ったのだろうか、と思うがさっぱり分からない。

ひとつ取引先から来ていたメールに返信をし、メールボックスを閉じた。パソコンは古いせいかいらいらするほどのっそりと動く。

頭の中では自然に五十嵐たちに連想するように昨日のことが思い浮かびため息が漏れそうになるが、寸前のところで飲みこんだ。

圭吾とばかな約束をしてしまった。久しぶりに聞く圭吾の声が懐かしく感じられて返事をしてしまったが、会いたいなどというのは今更だ。別れた直後は自分の後輩と二股を掛けていたということに、どうして？　と繰り返し思ったが、別れ話に香山を伴って来てちゃんと話も出来ない圭吾に失望もした。結婚まで考えていた人の仕打ちに傷はじくじくと痛むが、もう、圭吾とどうにかするつもりもな

いし、信じることもできなかった。そのくせ、圭吾が連絡してきたことで、香山を見ると溜飲が下がると言う自分は身勝手だと思う。
ああ、もうっ。
頭が混乱してくる。マウスを操作し保存データを呼び出すために、乱暴に何度もクリックをするが、パソコンの方は裏腹に重い体を動かすようにのっそりと画面に砂時計が表示され、思わず机につっぷしたくなる。不意に隣の同僚を見れば、コーヒー片手にブログをチェックしていた。彼女のパソコンは調子がいいようだ。
「内田さん」
呼ばれて顔を上げると、目の前に香山が立っている。
香山に話しかけられるのは、やたらに挑発的だったトイレ以来だ。
しかし、化粧も髪型も変わっていないのに以前とは全然印象が違って見える。可愛い雰囲気を振りまいていたのが、自分の気持ちとは別に見ても、それが無くなって疲れたような薄暗さを纏っていた。彼女は青白い顔をして、思いつめたような瞳でこちらを見つめている。
何？　と目で返すと、声を掛けてきたくせに口ごもり、視線を下に向けた。しかし、こちらは言葉を促してあげるほど親切ではない。暫くの後、意を決したように口を開いた。
「今日お時間いただいてもいいですか？　会社が終わった後に」
鼻で笑いそうになってしまった。その改まった丁寧な言葉使いはなんだ、と。
「ここじゃダメなの？」
「はい」
それは、きっぱりと挑むように返された。思わず眉間に皺が寄るのが分かる。圭吾といい香山といい自分に今更何の話があるというのか。
「いいよ、わかった」
そっけない返事をすると、香山はぺこりとお辞儀をして自分の席へ戻っていった。

終業後、香山が先に会社を出て、メールで待ち合わせ場所を知らせてきた。
指定先は会社近くの喫茶店で、昼休みに自分も何度か来たことがあり、誰かに会ったら嫌だなと思いつつも香山には何も言わなかった。早く済ませて帰りたい。
いらっしゃいませ、と愛想のいい声に迎えられ中へ入ると、そう広くはない店内に三組の客がいるだけだった。どれも会社帰り風のOLたちに見えたが、自分もその一人に加えられるのだろう。
その中で香山は席に座って待っていた。コートは脱いでいて、うすいピンクのニットワンピースの姿で、視線を下に向け微動だにしない。
「おまたせ」
そう言って前に腰かけると、はじかれたように香山は顔を上げ、小さく首を横に振った。店員がすぐに注文を取りに来たので紅茶を頼む。香山の前には、すでにカップが置かれていた。
「呼び出してすいませんでした」
香山はそう言って、長い髪を耳に掛け、作ったような笑みを浮かべた。香山がカップを手に取ると真っ黒な液体がゆらゆらと揺れるのが見えた。圭吾もよく飲んでいたブラックコーヒー。香りは好きだけど、飲むと口に広がる苦さと胃が重くなるような感覚がして自分は苦手だった。
「ここって会社の人たちがよく来ますよね。私、お昼とか会社から出ないんで気付かなくて」
汚ねぇなあ、と課長が香山に言っていたのを思い出す。
香山はお昼には毎日手作り弁当を持って来ており、みんなで感心していると、通りかかった課長が「その爪で料理するのか、汚ねぇなあ」と香山のマニキュアが綺麗に塗られた長い爪を指してぞっとするとからかった。たしかに、料理をするには邪魔な長さ。自分な

ら適当に返しておくが、香山は目に見えてショックを受けて沈んでしまい、課長もバツが悪そうな顔をして場が凍ってしまった。見ていて歯がゆく、もっと要領よくすればいいのにと思って心配したことがあった。外見は派手だが、中身は以外に真面目で要領が悪い。だから、こんなことをするような子だとは今でも信じられない。

「実は、彼のことで話があって」

そうだろうとは思っていた。香山が自分を呼び出すなんてそれしかないだろう。

「私、本当に悪いことをしたと思っています。謝っても許されることじゃないって分かっています。その上、こんなこと言うなんて自分が本当に悪い子になったみたいなんですけど――」

そこで言葉を切り、じっとこちらを見据えた。

「彼をこのままにしておいてもらえませんか」

「どういう意味？」

「圭吾くん、内田さんに連絡してますよね。私、偶然彼の携帯見ちゃったんです」

偶然、ね。

香山の後ろにひとりで座っている女の人が視界に入った。文庫本を開いている彼女は人待ちだろうか、などと頭をかすめる。

「もう、私には圭吾くんしかいないんです。彼がいなくなっちゃったら、私どうしていいか……本当にひどいことを言っているのは分かってるんです。でも、私には彼だけなんです」

トレーを持った店員がこちらに来たが、ただならぬ雰囲気を察したのか先ほどの愛想のいい顔は見せずに紅茶をテーブルに置いていった。

透明なカップは紅茶の湯気で汗をかいている。

「こっちだって、そうだったわよ」

ばかばかしい。なぜ、ここへ来てしまったのだろう。

「そうですよね。私が悪いです。でも、内田さんはいいじゃないですか。会社では課長に気に入られてるし、私なんて、いつも嫌味ば

っかり言われて……本当に毎日会社に来るのも嫌なんです」
何を言っているんだろうこの子は。目を思わず見開くのが自分でも分かった。
「お願いします、内田さん。私、このままじゃどうしたらいいのか分からなくて」
すん、と鼻をすする。
自分のことばかりだ。悲劇のヒロインになってしまって、自分は可哀そうなんて言っている彼女に怒りが湧いてくる。
「ばっかじゃないの？　何勝手なことばっかり言ってんのよ」
驚いたようなまん丸の目をした香山がこちらを見ていた。
しかし、店員も文庫本を読んでいた女性もこちらに注目しているのを感じる。出た声は大きかったようだった。でも、かまわない。
「こっちがどんな気持ちでいたか――」
別れ話を告げられたとき、青天の霹靂という言葉がぴったりだった。取り乱さなかったのはせめてものプライド。なのに、ふたりが歩いているのを見かけただけで、飲めないアルコールを浴びるほど飲んで、知らない男の部屋で朝を迎えてしまった。そんなみじめな気持ちは目の前の香山には絶対に分からない。
椅子に置いてある鞄を引っ掴むように手に取り、勢いよく立ちあがった。
「最悪。ちょっとは人のこと考えたら？」
今にも泣き出しそうな表情をしている香山を睨みつけ、そのまま足早に店を飛び出した。少しでも店から離れようと無意識に走っていたが、すぐに息が切れて足が止まってしまった。何度か肩で呼吸をして鎮めようとするが、なかなか動悸は収まらない。道行く人は変に思っているかも知れないが、止められなかった。
香山に怒りをぶつけても気はちっとも晴れない。むしろ、どんどん虚しくなり泣きたいような気持になっていく。
周りを見渡せばちらちらとスーツを着た会社帰り風の人たちが目に入る。思わず笑ってしまった。気付けば、無意識に走ってしまっ

たせいで、駅とは反対の方向へ来ていた。
ばかだなぁ。本当に間抜け。
もし、五十嵐がいたらいきいきと突っ込んでくれるだろう、と八重歯が覗く笑顔が頭に浮かんだ。こちらが、虚しいなんて考えられないくらいに。そう思うと、無性に飄々とした五十嵐の顔が見たくなったが、すぐに藤森さんの存在を思い出して、五十嵐のことを頭から追いやった。
ぽつりと冷たいものが頭に当たり、雨かもしれないと思い至る。空を見上げれば薄闇に紛れて雲の色は分からないが、また、降ってきそうな気配がした。朝に使った傘は会社に置いたままだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8255q/

見上げる先には

2011年3月17日13時40分発行